

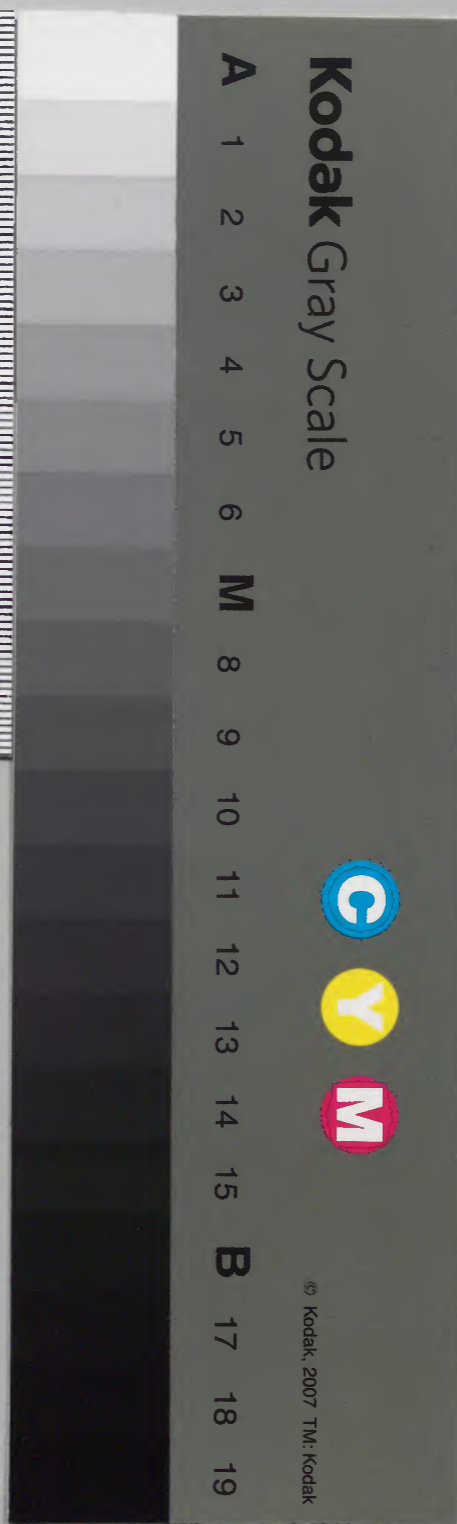
貞丈雜記

十六下

太政官文庫			
和	一	二	三
書	五	六	八
門	冊	函	架

內閣文庫			
和	一	二	三
書	五	六	八
類	冊	函	架

內閣文庫	
番號	和 11568
冊數	32 (32)
函號	212 17





氣色と云事旧記より毛八人の顔つきの事之氣色
キシヨク
 を云ふ事云々かたつきの子の指子を伺ふ事之氣色
 を損ずると云ハ腹を立て顔つきののちる事
 其方氣色は云々云々云ハ貴人か顔つきの
 物物の指番せざるに云々云々云ハつきの
 を云目々を云々云々云ハつきの
 云々云々云々云々云ハつきの
 云々云々云々云々云ハつきの

その穀のつきのものを粟と云ふ八人の粟ハ穀は
あつりもこの粟の穂子の面よりあつりあるを粟と云ふ
一節分セツブンの大豆を煮てきて初らるるありの時らひつむ
事今の世のあつりしと京教將軍の代も
節分の大豆を取てきて二月初牛の日は糸
らせし申年中恒例記は之のたつり

一芝居シバイと云ハ勸進能又ハ田楽テンカクを外見おのりして芝居
は舞つて見おるお芝居と云ふ

一きりもぐりキリモクリと云ふ粟とつちあはるる切虎落し
物進能田楽を外見おのりあつりしは件あつり

切てもぐりをあつりし粟とつちあはるる大和ぐりを奉
公元あつりしひいさばき理ゆつちあつりし
あつりし粟とつちあはるるは芝居の藝者の扱
あるとしてしるるひいさばきを云ふ

一遊藝ユウゲイ者シヤあつりしおのり花を煮てきて事昔は作り花
を煮てきて翌日を目を煮てきたるとし嵯峨川記は云物進
能あつりに申樂サルカクは花をうけし時トキハナガサ
英阿はさけは遠ひ比との事少路山同花代鈔の事
翌日は名敷はけ方身に初らるる粟とつちあはるる又大東方
より取らるる粟もあつりし英あげさびは

通書大全ニ云
赤口日忌會客
證事買賣文云
主口舌喧争赤口
日安陪清明夕書
簾笠内侍二見
夕リ赤口日又赤
舌日トモ云ナリ又
赤日トモ云

花を枝よあはれ作日と下はれ作日より七代
賤よ遠あはれと云祝を志す事と云
古ハ赤後シマクゴの出仕と云事也京朝内軍年中恒例記ニ云
赤後の出仕在る時を徳大名以下の家元もかく
此系也赤後の出仕ハ毎月は分シ年中定例記ニ
云赤の次の日の出仕と云出仕ありと思ふに古ハ供
元赤あはれ日ハ日とも出仕ハひし又云赤の目と
此供元出仕もあはれ事也披露あり云赤の目
とハ赤日といふ思日の事あり赤日ハ赤日神といふ
神のつとむる日と云辨舌を用るふりきり云

嵯川親元カサガハの
日記寛正六年
の記ニ云恒例
三方辰戌上極半
佐州子午武庫
郊酉トアリ上
極ハ東山殿の
意也佐州トハ
伊勢守才侍中
守貞彦武庫
ハ伊勢守貞親
ノ嫡子伊勢兵
庫守貞宗也
○室町日記永享
七年八月廿一日
則は徳日之故
可以廿三日命之
由は作出る

陰陽師の祝也それ出仕せずおひを謹む
法徳日トクニチといふ旧記ニ云年中定例記ニ云東山殿は
法日丑未の日ハ大名國持は供元ハ餅一折ハ太刀金進
上とひつどの日ハ太刀金進ハ太刀金進ハ餅一折ハ太刀金進
上と云異阿荒ある云丑の日ハ餅一折一合大豆粉
を引合ハ包口きと云信濃彌進直末月ハ此
太刀一腰金杉原十帖由目錄ニ云此ハ徳日の事
也ハ祝見ハ人の生れ性よりて祝ふべき吉日何
陰陽師の祝也この吉日を法日といふ也
徳目と云事本名ハ衰日ハ衰日といふおとろろの日と云

中づけを馬の上へてさすへ何村もろをさうて村令
 為さきとれはたはら持取らふといひかよふ子徳を
 由りお言ふとさき言ふを妻と書くと書くあり妻
 の字用ゐる熱く又都子娘と書くと熱く古書
 は、あーらふ言ふとさき事奉じ
 非家とさき日記は何りいふはあさりとさきと
 一 猿樂の家はあさりと能く猿未を上り
 武家よりいふて武藝を能くさる猿を非家
 のさき非家の不すれあさり我家業はあさる
 事ハぬむべしとて

一 ^{カウ}香會と云ハ人々あきし集りて香をさき遊ばせ
 あり香^{カウキ}香合ホのあきとさき^{香といふは}
 一 香^{カウキ}香と云ハ香をさき也香を三品も五品も焼^{カウ}
 出さきさきさきひをかきあはせあはせさきあは
 たるハ勝^{カウキ}かきあはせさき^{香といふは}の猿十種
 香源氏香字治山香小香香を外取作法
 あり香の家はさきとて
 一 香合と云ハ香をさきあつめてそれをたさき
 二つよりして花方お方とつうひて香をたきさき香の
 中づけおとりを評判して勝原をおたさき香合の

とこれれを考へ
へきるはきり
る一きりなき
心

に傳へるは悪くわづのそむ人なれ
おし傳へるその事の方手の後述は
やうにとひうづ

一 成敗と書てありやあるとよむ
やうに物る者物るをとりけ
とら付の今罪人をこらきるを成敗
をこらする罪人を取け
罪人斗はかきうん
おりの五年ひを成敗する

一 上表シマウヒヤウとハ役候を辞退するなり
本ハ我かゆひよりを何
んもさるへか付て持る

状を表と云へ表ハあつそす
心へ上といま若へ上る
を退きんきといか
ハ役候を辞退する時
の世俗候をあらう
上されり上る心
上表といひあつハせり

一 時刻は五更と云事あり一更ハ戌の時
云二更ハ亥の時
云三更ハ子の時
云四更ハ丑の時
云五更ハ寅の時
是を戌夜と云

一 時刻をいふ初より子
に漏刻ロウコクと云相あり銅の壺
ありて水の滴漏を
作て壺の中は

職員令後場
寮ノ下ニ守屋
鐘鼓ヲ撃ツ
見エタリ

立るこしを壺を漏壺と云其水を漏れと云を若
漏若と云を若くは刻めを付け壺を漏刻といふ
其刻めの数ハ四十八ききむじ一時の旨を四刻といふ
定めざるおこは若くは水の中へ立置くと時水漏りて
其のこき減るに随て若くは刻の後と云るおこし
ノ時は刻めをえぬハ子のつと云ふこきぬを
子のつと云ふ中是は准一初と云ふ初を漏刻を
用於收入ハ陰陽寮と云官の支配下は漏刻情と
云人をして其漏刻を守り居て鐘鼓をうつこ
時をりといふは事之若くは其一時を四刻といふ刻り

付くも今ハ昼夜を百刻と定む初一時ハ八刻迄
あつても彼の時の鼓を歩ツ数鼓ハ太鼓ノコトナリ 子午の
時ハ九ツ丑末の時ハ八ツ寅申の時ハ七ツ卯酉の時ハ
六ツ辰戌の時ハ五ツ巳亥の時ハ四ツ歩へきす
延喜式の陰陽寮式ハ是れより鐘鼓を歩事ハ是
物忌の事神併の部ハ記一歩より
方遠カタカハの事神併の部ハ記一歩より
貝覆カイオホヒの遊を始詳あるに原平盤表記五の奏
行綱中云五月廿日西八条へ推参りて是れハ三年
言の条 教も志を以て集りしより花人何のやんと思つて

あるをいふ
も女をいふ
をいふといふ
あり

一休のあしんばあしんばの夜はまことの夢はあつた善導
大師もいふたういふんをいふはあつた
箱を入置てその箱の中へ炭をいれ入る人をいひ
りをもいふといひ炭の事をいふといふあり
一二と云たういふはあつたといふあり
三ツ四ツ持ていふをいふといふはあつたといふあり
於才一の子鼓と一二の上の子と及びいふ
頼朝の嫡子子萬殿 頼朝の
おひさま 一二をいふはあつた
り源平盛衰記卷三十四云云胡時成実未下向の
条は見えたり

一 ナンテン 木名南天 南天 燭と云 をいふはあつたといふあり

云又鏡の表に入或ハ軍陣の時のまじりありといふ
て炭をいふといふ云事南天は炭をいふといふあり
他ハなき南天といふは難轉と目ト音あり和紙をいふ
と云心とて用る也炭をいふはあつたといふあり
云事南天は炭をいふといふあり

一 古事よ酒高あつたをいふはあつたといふあり
延年ハ飲ひ舞ひ多し樂々壽命を延び心
一 火爐 クハ は炭をいふといふはあつたといふあり
火箸を用るあり一宗五一冊 宗一の
のり といふはあつたといふあり

九月晦日よりあきりて三月晦日乃至き中山越りて
表向の山はつりあへば常の山あり可入の山は炭の山
炭とて和泉國横山と云ふ山は焼く炭とて山は對面
山ありちうぢやくの火降をらるる中 炭とて山あり
書いふもてあへく男女同しと云ふは付ぬやうにぬふの
どの次第と云むつりさるは方はいす系りの女房のこころ
しけりてさへゆりるが御前のひびぢりは炭を火を煮
をこれゆをほする傍茶も御前のすこひのゆををく
物とて山ありとて山ありぬものの中はとも火を煮るをを
てまのまて山ありとて山ありゆをゆをゆをゆをゆを

中々この山をさあより修明門院の山ありとて山あり
々々人々あんとて山ありけりて山ありのすこひのゆをを
きとあつをぬるをををををををををををををををを
山ありとて山ありぬものの中はとも火を煮るをを
らるる炭を用ふとて山ありとて山ありぬものの中はとも
山ありとて山ありぬものの中はとも火を煮るをを
とて山ありとて山ありぬものの中はとも火を煮るをを
らるる炭を用ふとて山ありとて山ありぬものの中はとも
山ありとて山ありぬものの中はとも火を煮るをを
とて山ありとて山ありぬものの中はとも火を煮るをを

一 白炭のり宗五一冊は云和泉國横山と云ふ山は焼

一 くらきとていさく和泉草は云横山炭泉別より出之炭
 の色白く内裏は方沸煎の炭官女子の草は云く
 草は云く不汚あり賞之昔ハ毎日運上ス云く夫木集卷
 二十難の部山の歌の内は六帖題先後於臣新六は
 何とていさくやけをいさく云く云く云く云く云く
 一 田舎はの祖も風俗も古代の事の残りる事あり云く
 京は云く古風強きれも繁花あり古風を
 失ひる事も民者ふか多しに戸は志無あり徳政の
 人の入交りる事あり古風も目くは改り古風
 を取失ひる事あり詞も古風あり田舎の風俗も

取べきものあり

徳と云く其おこ
 一 付くこと元
 を云く根合類の
 時を知りてなす
 精のこりえ之則
 精の徳も大の盗
 人をやゆハ大の
 とりえ之則大の
 徳も猫の氣を
 取るハ猫のとりえ
 之財猫の徳も
 人ハ仁義を行ふ
 を人のとりえと
 すくハ財の徳も
 利欲の心あるハ
 仁義を以てする
 あり是を不徳と云

徳政と云ハ唐土より仁政を云く仁政とハ天下の徳人を
 おもむこと徳む政を云く日本も上皇の如く徳
 倉將軍の時代も徳政と云ハ古の道なり古徳の中におこに
 徳政と云ハあるを云く考べし京於將軍の時代はあり
 義政との比すの如徳政と云ハ人の令報米穀法を
 具木を借りるを云く返さば赤ものふすりるは
 免さるるを云くおきり以後近代もあらずとも借り
 免るる物をかきぬ格より作付を徳政と云あり
 いしと後世も徳政の行ひ格大にお遠あり仁徳

太平記卷卅景
軍ノ条ニ桃井
播ノ守ヲ討テ
以トテ軍ノヤウ
ヲ申サレケレ蠟
燭ヲ明ニトモシ
テ見玉フ云々
此時代既ニラウ
ワク有リ

と利徳との遠也世の遠は名を以てす徳を以て
と云換徳も仁義の徳を以て思ふある人の名を捨
て利徳を以て思ふこと思ふ人の利徳を好む
禍の本也

一 萩の灯ハ油火布式之禁衣トシハ油火を用らるゆ
灯の字をお不とあざらと云々 お不とあざらといハ大南油の略也 大南油
と云るハ大敵ハ日本のは敵を云ハ蠟燭と云ふもの
吳國より後を以て後日本をも作りてされ本式
すあざら

一 關を孔子と書る例役名の類より

貝原氏か和漢
名数ニ箱根ヨリ
以東ヲ坂東ト
称ストアル後世
之説也關東ト
云モ箱根関不
ヨリ東ノ事也ト
云フ人モアリ是
又並世ノ説也

一 關東坂東の事近江國會坂關より東を指て関東
と云上野と信濃の堺の碓井より東を坂東と云
平家物語ハ齋藤別當ハ坂東武者の對を善と云
を云へるも是之坂東八州と云ハ武藏お模あ房上総
下総上陸上野下野是之後世常陸を除て巨州を
加ハ小田原北條氏の領地ハ對の事之を對を陸ハ佐
井氏の領地トハ北條氏の領地ハ非ラハ陸と云
關ハ州と云名目ハ非之坂東八州と云ハ又東監と云
不の関東と云ハ右と云異也東監十七建仁二年
の紀ハ関東二十八ヶ國關西三十八ヶ國トあり是ハ五畿内

漁倉大双紙と云
書りし是六永和
五年より文政十一
年と謙倉の
合戦のものを云
記録二冊あり
故京方の出り
ありし一名太平
後記と云

書籍之部

付録ハ宗流の云ハカ、そのたるるも、遊まずして古
去をうる心持を記ハカ、さきまとのある云云也

一 武家の故実記、たる云、大双紙と名付し、る書六品あり、川

大双紙と云ハ、川伊豫守貞世の作也、貞世法名 宗五大双紙

と云ハ、伊勢下総守貞頼の作也、貞頼法名宗五と云、
宗五大双紙一名宗五一冊と

云又、大館大双紙と云ハ、大館伊豫守尚氏の作也、
尚氏法名常真と云、大館大双紙
一名ハ書札認指秘傳抄と云也

佐々木氏の作也、佐々木氏名宗 三儀一統大双紙と云ハ、今

川小笠原伊勢の三家心を、一ツとして記したる云と云

又大双紙と云ハ、一冊あり、三儀一統と似るもの也

作書つすひ、このあ、す小笠原家の書也

貞丈三儀一統

一冊アラハシタ
リ見合スヘシ

満忠一本六憲

忠トアリ憲忠モ
伊勢氏ノ先祖
ニ無之

義満公御代、日

記ノ中、所々、今

川伊豫守貞世

名見タリ、其比、今

川氏族モ多ト云
氏武家ノ故實ヲ
知タル人ハ貞世ナリ
今川大双紙ト云テ
武家ノ故実ヲ記

一 三儀一統ハ、義満公の法代小笠原兵庫助長秀、今川亮宗
太丈氏頼、伊勢武藏守満忠、以三人より作す、三人心を
一ツとしてあ、る、三儀一統と云由、其書の序文は
見えり、甚信ハ、か、さ、る、貞丈、按、出、る、小三儀一統の
書一冊の云、將軍家の作をうけ、を備えりて撰、る、書
とハ、多、見、え、す、自、身、の、亮、書、と、見、の、書、と、云、上、義
満公の法代、今川亮宗、太丈氏頼、伊勢武藏守満忠、と
以、人、ハ、あ、る、以、の、今、川、ハ、伊、豫、守、貞、世、伊、勢、ハ、伊、勢、守
貞、信、之、是、り、と、云、信、ハ、か、さ、る、を、知、登、り、か、の、あ、り、か、の、云

シ置レ丸書アリ

此序文と三儀一統と云題号とハ後人の偽作あり
この書の本文ハいづれもゆきき書と云あり之用は三
きものこの本の題号ハ尚書法集三儀一統と云
とありいづれも書籍として是れと云き題号の云い
すまじくこれハ元來ハ尚書法集と云りいひ
を後ハ三儀一統といふ名をくらして書きたる也
又此書に題號ハ成たる所あり
弘安禮節といふ書ハ今板行後宇多院の法代弘安
年中ハ上皇龜山院の定め給ひ礼法を院中
の家より禁中へ對してその礼法之書の内書札の

虎ノ巻ノ事是
ヨリ三枚目ニモ
アリ

礼法を取て武家の書札の法式よりして傳へる
あり之武家ハ別ハ武家の法式あり
虎の巻といふ書一名ハ三畧の傳りも云はハ源義経於
臣鬼一法眼より受け傳へられし傳りも世に傳
る虎の巻といふ源義経の書傳の書とあるあり
似せものありしは世にけハ世にハ虎の巻を云ふ
真言符字その外ハあひの指ありの云を書
のせて軍傳の用よりしる巻きありし書の本
傳來の系圖ありその系圖の連名の内出家の名
なくせられし付て考りし書の一辨と思ひ合せられし家の

偽作したる書ある一信用しかりきり用ふまじき書

一庭訓往来ハ鎌倉時代の人玄惠法師の作ハ素往来ハ京師將軍の時代の人一榮掾政兼良公の所作ハ常用

集又下學集ありも玄惠の作と云々今の常用集ハ後の人増減ありし如く一慶長年中板行

ハ昔の常用集あり かやうの俗ちつぎ書もあつて

あつてハ皆院掾あり多し一單紙物語の類も古

代の物ハ檢校あり多しあつて事考るたまけ

にあつてしむしんたうある記録どもハ益ありきり

一美人草と云書あり是多賀典後者高忠う小笠原

辰一弓馬の如実尋やたる書之寛正五年に記る

書也一名をた言忠の書と云は書下板もせり

美人草といふ

一書物ハかみ草紙とも何れともあつて見れハ見ゆ秘

智恵を指申とあり孝文の族ハかみ草紙ありと

あつてりしゆもあつてハあやうしハかみ草紙も

能きりハいづれもあつてりしゆハあやうしハ

一書物ハ正説とありもあつてりしゆハあやうし

を書いたるもそれを見たりしゆハ書物とありしゆ

よしと云ふも智恵とありしゆハ見わけかりし書

信せハ書ふまじきと云ふもあつてりしゆハ見わけ

されハ用よ〜ぬ之早亮ハ生れたの智慧のた〜き人ハ何〜
されハ見ふるありた〜されも多〜書を見ぬ〜
そ力見大概ハ見ぬ〜

一 秘書といふ物ハみ〜た人ハ見せ〜るもれ〜る秘書
人ハお〜たゆ〜て書き〜て〜我
も人の書も〜書られハ〜書絶え〜るあり〜
て後世も〜傳〜てあり〜た〜て人〜ら
せ〜る時ハ外ハ抄あり〜る書絶〜るあり

一 藤九郎盛長記と云書何〜杖桑見聞私記と云書何〜
け見ゆ私記ハ大江廣元之作と云書西巻と云書

杖桑見聞私記
大江廣元記
トテ其存ニモ廣
元ノ名ヲ祀タリ
然レ其云ニ記
セルノ廣元存
生ノ時代ヨリ百
年斗後迄未
タル書ヲ引用セ
ルノ所ニアリ是
ヲ以テ全篇信作
ナルヲ知ルヘシ
依之貞文杖桑
見聞私記亦信
ト云書ヲアラセ
リ見入シ

代のお遠くあり有実を〜初ぬ志のみ〜に信作也。

葛

有徳院採石成嶋道範ト云作也信長

記の内甚傳多き申大久保彦左忠教の家記見

え〜る彦左忠教ハ
赤松宮内代也如〜世も傳あり〜古書の振子

作〜て古書あり〜る物あり〜るに信仰〜

我〜る身情〜る中眼明あり〜た〜る

あり〜る家武家の有実の書〜る志の抄あり〜

近世軍学者といふ志の書〜る妄説信作あり

油野中〜

義経記六六韜
の書とあり虎
の巻といふハ
又云云

一 或説は云源義経の虎の巻と云ハ太公望のあづもりなる
六韜と云書の中の虎韜の巻を云今之世ハ六韜の
書板行しておおむよいふもあれども義経の時分
ハ板行ハあり世ハ甚珍なりかりしに鬼一法眼秘
して人ハ見せざりしを義経ハ見せし盗之と云
虎韜の巻と云字ハとり誤し虎の巻と云
と云ハ説ハさもあらず抄ハさゆも

一 鎌倉年中行事と云書ハ頼朝実朝將軍家の事
を記したる書ハあり是利辰の比代鎌倉の由所
基氏の家の年中行事ハ成氏の時の人かき書之

犬追物秘記ハ
扶桑見ゆ秘記
ノ校書ノ偽作
ノ物也

一 犬追物秘記と云書二冊板行ハ何ハ三浦介上総介西人
の作とて云書のおもおあ人の連名あり是太公望傳り
おハ犬追物の古書の切れと云れをおこし云ありつり
近年の人新ハ作意をたきて後にも古法にも
曾てと云るをまきと云りやハ小書なるおハ又徳大寺
家の犬追物と云書と云おあり是の正保年中武州豊
崎郡王子村ハ高津藩藩士ハ張切と云ハ犬追
物の作法を以て鎌倉新時代の事ハ作らる村
換見其外ハ皆鎌倉時代の武士の名を用ひて

ら莫書はけふ徳大寺家の秘書あり中記に
大あつたあつたこれらはははををしきしてまよひ
人まよひしきまよひ

一 免のよみ子と云ふ所の京都將軍時代の書である。
家のめは我うをてし娘をへまよひせしと
中傳のよみそのお女のいすしめ又女房の秘書を
かきけるものも吾き書し

一 清江十郎左衛門久慶の記したる犬追おの書一巻は
元永八年に
記タル也し
を書かぬ時代の犬追おの書を著しつて後
も何れもよみかき書し傳書ありし騎射秘抄の序

に犬追物の鎌倉の右大臣家 貞朝あり
米助の子 の時権輿すよ
るより 権輿とい
始のよみ 此れは頼朝の時代犬追おありきし
傳書ありし也

一 布衣記と云書は永仁三年八月法承の青侍北面等
二十余人富後越前守助成守宅より系合し北面の
武士の故実を定め連刺を以てヤ合し是調谷倉の
殺の事もけ書し之ハく見たり実録あり

一 訓聞集と云書あり醍醐天皇の法時大臣維時入唐
して傳書し軍術の秘書之をまはるは傳書す
と世に訓聞集といふ也あり是ハ後の人の傳作あり

句讀点ノ形ノヲ
圖ト云ハフ批ト
云句ニ圈点ヲ
用ルラハ讀ニ
批点ヲ用ヘシ如此
スルハ句ト讀ト
キレスニテヨシ

「君」ところ中ハ人の名ヲこと官の集引と加て知テ

「引」中の集引ハ物の本ヲ言ハ年号と云レ

「右」所中ハ人の名ヲ官中ニ書の名ヲ二ハ年号は数一書ニ

「書」物ハ篇章句讀と云テ其ノ内ハ新ト云年号と云

「一」テ氣クモ云一書ハ句トハ一テ氣内ノ讀トハ一テ氣内ノ始テ

終テ其ノ内ノ心ヲ以テ内ノ心ヲ以テ内ノ心ヲ以テ

「と」云一句の内ニ其ノことハ其ノ事ヲ以テ内ノ心ヲ以テ

「書」物ハ集引点ヲ付テ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

「の」内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

「集」の序ありハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

集の序ありハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ
の事ト云テ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

「一」書籍ハ序跋凡例ト云テ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

ありハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

「い」の内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

「は」あり其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

例を以テ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

「れ」ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

「の」ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

「内」典外典ト云テ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ其ノ内ハ

くらぬハ出家の方より御し

致書より音を著るるおは何もの事よりよし時を
よきよりしつことけり書るるコトカキよりしコトハカキ詞書
よりしお書るるハいしぬ之田舎人の詞書をお
書るる

校合キヤウカウと校讎カウシウとも校訂ケウテイとも云ハは書と彼書と同一致

本を考せてあ方を引くく遠くをい試方の
本又出入れて出くを云く

著述チヨシツとも編輯ヘンシウとも云ハ書籍を作りあはさるる
往チウとも解カイとも釋シヤクとも云ハ皆書籍の文句の知れぬ

事をいひりときて條狀カウシヤウをおあはさるるを云チウカイチウシヤウ注解註狀
あはさるる又往疏チウソとも云く

抄チウとも云ハ抜書之又往解の事を抄とも云く

書籍を幾巻と云又巻の一巻の二ある云事ハ上古ハ
紙あのみし紙竹をとりて火をあめりて紙をぬきて書

已り外よりなりし文字をうきてカワ韋カワ又あつらひ
て書て云く紙巻といひ之又一篇二篇といふあえ

云く紙の篇ハあしとよし書之書籍を作るるを書を
あしと云も古のより起りたる詞之を後紙をつぎ

て巻物なるも古の趣をすあひたる之巻物ハよし時

ころひらけて候り、恐き故折本と云ふ本も有るあり
 已分本あれ程古の越を以て幾世も其の一本を以て
 書籍を著し候るは、いふも本著と遠なき、拙り文字を以
 假名を以て寫せし、本著不著遠と云ふも、いふも
 に字一をへ、却外の同書を求め引く、と云ふも
 一、我推量を以て本著の文字を著出して、字を以て
 きる、我推量の考を、文字の傍に朱を以て、かき
 加え、一、
 義経記、作者詳あらず、其れも甚く、きき書、我
 物語、比叡山の傍の作、これひと、親王法い、この案、

法い、この作は、^我心のち、いふも、恐き、とある
 して、推し、但作者の名、いふ、す、原平盛、表記、葉
 室大納言、時長、の作、平家物語、信濃前、日行長の
 の作、太平記、玄惠法、平葉、作、次、九、葉、木の作、保
 元物語、平治物語、作者、いふ、れ、され、も、甚く、き、書、あり
 か、その古き、物語、の、類、は、能、按、よ、あり、物、之、故、実、の、考、
 あり、よ、可、なり、なり、
 一、唐土の書、ハ、四書五経、史記、漢書、を、始め、と、て、お、ひ、く
 しく、あり、て、不足、あり、き、上、り、又、年、々、唐土、より、も、後、に、来
 る、故、か、その、書、ハ、不足、あり、多、く、あり、日本、の、古、代、の、書、ハ、及、び、

兵乱のやけうせく甚く又かろの事を志つた
おろのふか多かれとも日本の事を志るるおろの
かろ日本はせられて日本の古事お実あを新なる
日本上古のふき日記日本書紀古事記古語拾遺續
日本紀日本後紀續日本後紀文徳実録三代実
録類聚國史等之又世継物語續世継物語神皇
正統記日本紀畧帝王編年記の類も実録之禁
衣法式のふ延喜式儀式律令格式西宮記北山抄に
次牙雲圖抄ホ之官位の故実ハ官職秘抄職原抄
百寮訓要抄等之装束の故実ハ後照念院及装

束抄雅亮装束抄 饒抄桃華葉抄辰翰装束抄
三葉装束抄ホ之是のそに傳ふ古書ハ数りき
もあ古実を好む人ハ志るひ交を求れハ世
跡し古書おのつら子ハ入る之又武家の日記
ハ東鑑ハ実録之鎌倉の日記之室町記室町日記を
も京師將軍の实録之又古の实録を似せて傳
作りける書も有能く存てるる又禁中の故
ハ禁秘抄侍中郡要公事根源後醍醐院年中行事
同日中行事ホふあり拾遺抄もさるの事あり
此外古書ハ数限もあ尋りて

一 高忠少書と云ハ寛正年中以の人多賀巻後言忠の
 小笠原辰不守て書くもおん多矢木の故実を記せし
 き書之後の人美人草と名つけたりの書の為人の
 如く秘蔵して今もみせられし心とを名付しうとを
 云傳の是は書先年板切しと世も多く有しう今ハ
 板切の本世も少く成り 板切の本もよき本也
 少文字の書ちとあり
 一 奥州十二年の合戦後巻お 前九年後三年
 の合戦あり ハ元将軍雅
 久の画きし之鎌倉將軍實朝公の時京都より取り寄
 せ給ひしよし東鑑巻十九 三 甲子と云えり又將門合戦の
 後巻十九のせりれし中同巻と云えり十二年合戦の

東鑑卷十九兼
 元四年庚午十一
 月廿三日丁未奥
 州十二年合戦
 繪自京都被召
 下之今日御覽
 仲業依御讀
 申其詞云、
 東鑑卷十九元
 元年甲子十月
 廿六日甲申將軍
 家日未作画工
 於京都被因
 將門合戦繪今
 日到東掃部頭
 入道所調進也
 二十箇卷納時
 繪櫃殊御自
 愛云、

繪とも世も有り又土佐光信の二谷合戦の絵又保元平治
 合戦の絵又土佐光長う年中行事の絵と外古代乃
 絵所の画も絵ハ故実の考の爲もあり事多し心を
 付てん下人物衣服法道具の於今の世の如く形乃
 遠くも有りし心も心を付て考へし古代の繪存も
 世も多しあり
 何事とも正史実録もなき事不信用しかりきりあれ
 とも正史実録もなき事又たりあり實事あり
 るもあり正史実録も記し漏りたり法家の日記も
 に記しそあれとも世も昔に人知らぬ事も有り其本

實朝公の歌集
金塊集と云三
冊あり晴を祈
給一歌金塊集
あり夫木抄ノ歌
ハ金塊集より
抜たる也

抄々鎌倉右大臣 実朝 晴を祈又給ひし歌
[ときによりすくれハ民のあけきハ大就玉の御たす
ハ歌集ハ建暦元年七月洪水滔天土民愁歌也
事を思ひて一人幸向本宮致祈念云々 右木抄 東鑑卷十
九建暦元年七月の記文をえりふ 實朝ハ西をうへて
晴を祈る給ひし事 足元寺地蔵堂の法集より
是をうりるあれハ偽ハあり也 實朝ハ東鑑ハ元
とありあれハとて偽也といふハ 東鑑ハ記漏し
たはききてはありし事と云へ

一前太平記又前々太平記あるハ近代の人の作也 武具馬

前太平記ハ林大
学頭ノ才子平山
素閑と云者ノ
作也 京都ニ住シ
テ石田軍記ヲ作
リ板行シ作者
御詮義ニ依テ
京都ヲ夜逃シテ
江戸へ来リ正徳
二年死去 今文
也 古キ物語ナド
ヲアツテ前太平
記ヲ書タレ其
中ニ自作妄説
ヲ多ク交タレハ
信用スルニタラ
ズ 證據ニ引用
ベカラス

具あるの考ハあらず 抄の證據より引く一 幼き子等の
もてあをひ陰々としの歌もとも古代の人の作りしもの
有実の考ハあり 證據ハ引用多クあり 言館草子 田村
孝子めものの子 子文正 孝子ふとの歌 如く云 龜の
院物あれ古き忠之證據より引く

和漢朗詠集ハ四條大納言公任の集められし書也
そ書ハ詩も何り文も何り 抄も何り それより一を
つけしものを朗詠と云 古代ハ酒宴あむの時も
又折るれ事ハゆれて 正徳其事ハよき 忠の
證據をいひし 抄もあひしもの 偏ハ出る

記せし別の文と見えたりされハ鱗川祝元ウ記せし爲中
 日ノ記と云へるハ即ち此日ノ事ヲ記せし故日ノ記多ク也
ヒニツキ
ニキキ 日ノ記と唱へしハ一日ノ事と云へるあり

一 八廻日記の事大追物の矢由法を記せし書なきして八廻日
 記又八廻外湯あり云々ハ八廻と云ハ何れノ事ナリ
 るにハの字ハ假字ナシハの字ありハ左ありハ大追物
 の繩きと云ハ射する矢の落てるを矢由法と云ハ大廻と



大庫
 南政
 大尾記雜文

岡田鼎藏板

發行書林

大坂

江戸

河内屋喜兵衛	河内屋茂兵衛	須原屋茂兵衛	山城屋佐兵衛	須原屋新兵衛	英大助	岡田屋嘉七	和泉屋吉兵衛	和泉屋善兵衛	岡村庄助	須原屋伊八	和泉屋金右衛門	下子屋平兵衛
--------	--------	--------	--------	--------	-----	-------	--------	--------	------	-------	---------	--------

